慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	タキーザーデとイラン立憲思想(上)
Sub Title	Taqizade and the Iranian constitutional thought
Author	佐野, 東生(Sano, Tosei)
Publisher	三田史学会
Publication year	2000
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.69, No.2 (2000. 3) ,p.95(263)- 114(282)
JaLC DOI	
Abstract	Seyyed Hasan Taqizaade (1878-1970) played an important part in political, diplomatic, and cultural fields in the 20th century's Iran. He was active as a nationalist and constitutionalist during and immediately after the Iranian Constitutional Revolution (1906-1911). In this article, we discuss his nationalism and constitutional thought by analyzing his two writings, firstly, Tahqiq-e Haalaat-e Konunia-ye Iaraan baa Mohaakemaat-e Taariakhia (An Analysis of the Present Situation of Iran through Historical Judgement) , an article written in 1904-05, immediately before the Revolution, and secondly, his articles in the Persian newspaper Kaave, written from 1916 to 1921 in Berlin. In the former article, Taqizaade evaluates Iranian history from the ancient times to the contemporary era with an 'objective' stance based on historical evidences. He appreciates ancient Iran to be prosperous, but does not overestimate it, attributing the main cause of its decline to the internal corruption of rulers, which resulted in the Arab conquest. According to him, the Arabic conquest was a cause of Iran's stagnation, but the Mongolian conquest caused a more disastrous effect, after which a disparity in the level of civilization between Iran and the West began to expand. However, the Qaajaar dynasty has been unaware of it, continuing internal despotism. Taqiazaade makes two proposals to reform this corrupted situation, the first, the introduction of Western constitutional system, and the second, the introduction of Western sciences and educational system. On the whole, compared to the extreme nationalistic tendency at that time admiring the ancient history and traditions of Iran without any criticism, he seemed to be a relatively moderate nationalist. In the articles of Kaave, Taqizaade takes even more critical stance towards the sociopolitical situation of Iran during and after the Revolution. He criticizes the new elite class who participated in the Revolution with enthusiastic patriotism, but gradually became extreme nationalists or mere politicians. At the same time, he is very critical of the ignorance of the masses, who have been easily influenced with the extreme patriotic propaganda, or begun the shallow imitation of politicians in the excessively political trend after the Revolution. Also, the moral corruption of a part of 'ulama (clergy) with an extreme inclination to the Islamic law is criticized. According to him, these problems are the obstacles to found a complete constitutional system in Iran. This indication is quite significant in order to reassess the role, in particular, of the masses in the Revolution, which seems to have been often 'negative' from his point of view. Taqizaade suggests these problems stem from a lack of the exact comprehension of Western sciences and political system. Therefore, he advocates educational reform with the primary purpose of the expansion of a literacy rate among the masses. In comparison with the former article, Taqiazaade stresses the importance of educational reform instead of political reforms in Kaiave. However, we can see in his two writings the same belief in establishing an modern nation-state on the basis of the moderate nationalism.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20000300-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

タキーザーデとイラン立憲思想（上）

佐野　東生

はじめに

セイェド・ハサン・タキーザーデ Seyyed Ḥasan Taqīzāde（一八七八～一九七〇）は、タブリーズ出身の政治家、イラン学者として、生涯にわたり多彩な政治・外交・文化活動をなした人物である。

タキーザーデはタブリーズのウラマーの家に生まれた。最初宗教教育を受けたが、やがて西洋の学問に興味を持ち、フランス語、医学などをタブリーズの医師から教わった。(1) 同時に、フランス語の著作やマルコム・ハーン Mīrzā Malkom Khān Naẓem al-Doule を始めとするイラン立憲思想家の書を通じて、政治思想に傾倒した。一九〇三年、タキーザーデは学友タルビーヤト Mīrzā Moḥammad ʻAlī Khān Tarbīyat らと共に、学術誌『学術の宝庫』*Ganjīne-ye Fonūn* を一年間発行した。一九〇四年、トルコ、エジプトを旅行し、カイロでペルシャ語紙の『ヘクマト』*Ḥekmat* に『歴史的裁定によるイラン現状分析』*Taḥqīq-e Ḥālāt-e Konūnī-ye Īrān bā Moḥākemāt-e Tārīkhī* を発表、若き立憲主義者としてタキーザーデは名声を確立した。

一九〇五年、タブリーズ帰還後、タキーザーデは政治活動を本格化する。一九〇六年、立憲革命開始と共にタブリーズ選出国会議員として革命に参加した。その後一九〇八年の反革命に際しテヘランを脱出、イギリスでケンブリッジ大学のブラウン博士 Edward Granville Browne の支援を受けて反専制運動を展開した。一九〇九年立憲制回復と共にタキーザーデは第二期国会議員に選出され、民主党リーダーとなる。一九一〇年、穏健派

のべヘバハーニー師 Seyyed ʻAbdo'llāh Behbahānī 暗殺の嫌疑をかけられ再びイランを出国、イスタンブール、ロンドン、アメリカを経て一九一四年ベルリンにわたった。第一次大戦中から一九二一年にかけ、タキーザーデはベルリンで政治・文化紙『カーヴェ』*Kāve* を発行し、戦争中はドイツ側に立った政治宣伝、戦後はイラン内政批判を行った。

タキーザーデは一九二二年、イラン・ソビエト通商協定締結のため、イラン側代表としてモスクワに滞在、一九二四年、第五期国会議員としてテヘラン入りする。タキーザーデはレザー・ハーン Reḍā Khān（後のシャー）による王制変更の法案には反対したが、パフラヴィー朝が成立すると、ホラーサーン州知事、駐英大使、運輸大臣を歴任する。一九三三年には、財務大臣としてイギリス・ペルシア石油協定更新の交渉にあたった。その後駐仏大使となるが、シャーを批判したとの理由で解任され、ロンドン大学で教鞭をとった。一九四一年、レザー・シャー退位と共に、タキーザーデは再び駐英大使となり、一九四八年、第一五期国会議員としてテヘラン入り、一九五〇年に国会上院議長を務めた。以後タキーザーデは、書籍出版・翻訳局顧問、コロンビア大学講師など、文化活動を中心に行い、九〇年を越える生涯を閉じた。イラン学者としてのタキーザーデの代表的著作には、『古代イランの暦法』*Gāh-shomāri dar Īrān-e Qadīm*[2] などがある。

タキーザーデは立憲革命前後の前半生を革命家として、パフラヴィー朝成立後の後半生を政治家、文化人として送った。これをもって革命家の体制との妥協・保守化と批判することはたやすい。だがタキーザーデはその著作、論文、講演に見られるように、生涯を通じ祖国イランの復興を願うナショナリストであり続けた。タキーザーデが立憲革命に参加したのも、イランの後進性を批判し、西洋文明の受容を唱えたのも、またパフラヴィー朝期に様々な役職を歴任したのも、立場・方法こそ違え、常に、伝統王朝から国民国家への再生途上にあったイランへの寄与が念頭にあったためといえよう。

本論では、革命家として活動した立憲革命前後のタキーザーデの思想を見ることを通じ、一貫したナショナリストとしてのタキーザーデの立場を考察する。いうまでもなく、西洋に発するナショナリズムの思想は、近代的国民国家を形成する上での前提となるものであった。コッタム Richard W. Cottam によれば、イランにおけるナショナリズムは、一九世紀以来、西洋の影響を受けた

一部知識人、商人等によって推進された。イランの場合、ナショナリズムは、共通言語としてのペルシャ語、歴史としてのイラン古代史、そして地理的範疇としてのイラン高原などを核として形成されたが、同じく西洋の近代国家の枠組みをなす立憲制と表裏をなすものとして、立憲思想の背景に存在したものと思われる。しかし、コッタムは、総じて大衆の間では近代的ナショナリズムに対する理解が行き渡らず、立憲革命においても、シャーを筆頭とする保守層の反発と相俟って、こうしたナショナリズム、立憲制に対する理解の欠如がマイナス要因として作用したとしている。(3)

他方、タバコ・ボイコット運動から立憲革命に至る政治的変動において、都市住民を中心に広範な大衆層の参加が見られたのも事実である。アファリー Janet Afary は最近の研究で、立憲革命に際し、バクーを中心とする社会民主党がイラン国内に支部を広げ、モジャーヘディーン Mojāhedīn と呼ばれる革命を擁護する大衆的軍事組織、また公式、非公式の各種アンジョマンと密接に連携していた実態を明らかにしている。(4) アファリーによれば、社会民主党は土地改革、八時間労働などの急進的改革を主張しつつも、本質的にナショナリズムを肯定していたとされる。これは、大衆レベルでナショナリズムに対する一定の理解が存在したことを示唆するものであり、コッタムの説に疑問を呈するものといえるだろう。

しかし、当時のイラン大衆が、ナショナリズム、立憲制をどの程度正確に理解していたかは、史料上の制約もあって必ずしも明らかではないと思われる。アファリーは、タキーザーデを、国会における社会民主主義的急進派の代表として位置づけているが、次第にモジャーヘディーンの急進的行動と距離を置き、大衆の「無知」を批判するようになったと指摘している。(5) すなわち、タキーザーデに代表される当時の若手知識人によるナショナリズム、立憲制への理解と、大衆レベルの理解にはやはり格差が見られ、それが革命に際しての路線、行動の微妙な相違となって顕在化していったとも考えられる。

以上の点を考察する上で、タキーザーデが大筋でいかなる思想を抱きつつ革命に参加し、それが革命の経験を経て、革命に対する総体的評価を含め、いかに変容していったかを把握することは、ひとつの手掛かりを提供するものとなりうる。もちろんタキーザーデは純粋な思想家ではなく、この時期に政治活動を除き、多様な思想的著作を残したわけではない。しかしながら、先に指摘し

た『歴史的裁定によるイラン現状分析』には、革命直前の時期におけるナショナリズムと立憲思想が簡潔に示されている。また、『カーヴェ』紙の政治・社会論説には、革命を経てなお理想と遠いイランの現実への批判と、それに対する解決策が示されている。いわば両者は、一九世紀のイラン立憲思想に基づきながら、革命を経てイランへの洞察を深めていったタキーザーデの、ナショナリストとしての思想的営為を如実に示すものであると言える。そこで、本論では、この二つの著作を紹介、分析することを通じ、当時の若手立憲主義者の代表格であるタキーザーデのナショナリズム思想を明らかにするとともに、タキーザーデによる、大衆の問題を含めた立憲革命に対する評価、及びそれを踏まえた上でのイランに対する改革案について考察する。(6)

第一章　タキーザーデの初期立憲思想

第一節　思想的背景

タキーザーデは立憲革命に先立ち、タブリーズで書店を経営するとともに、イラン内外の政治思想関係の書、新聞を乱読した。タキーザーデの回想によれば、その内容はマルコム・ハーン、ターレボフ 'Abd al-Raḥīm Tālebof の著作、『エブラーヒム・ベクの旅行記』*Seyāḥatnāme-ye Ebrāhīm Bek* などイラン立憲思想の書、『アフタル』*Aftar*（イスタンブール）、『ソライヤー』*Thorayyā*（カイロ）、『ハブロル・マティン』*Ḥabl al-Matīn*（カルカッタ）などイラン国外で発行されていた改革派ペルシャ語紙、その他フランスの啓蒙思想書、オスマン朝、コーカサス、アラブの改革思想の書、新聞を広範に含んでいた。(7)

中でもマルコム・ハーンの及ぼした影響について、タキーザーデは、「我々はファルシー Ḥājj Mīrzā Aqā Farshī（タブリーズ選出第一期国会議員）とともにマルコム・ハーンの諸論文を読んだものだった。中でも、立憲制の諸原則の利益について書かれた論文で、文章に「もし国民が議員を持っていたなら」、あるいは「もし国民の代議員が監督を行っていたなら、統治者や地主はこうしたことを行い得ない。」との言い回しが頻繁に繰り返されていた。殆ど全てのマルコム・ハーンの著作が集められており、私自身、筆写してすべて所持していた。」と述べている。(8)

マルコム・ハーンは自由、法の支配、西洋文明の無条

件受容を唱え、立法府設立による立憲王制への移行へとその改革思想を展開していった立憲思想の先駆的存在である。[9] 一九世紀ヨーロッパの進歩思想に基づいたマルコム・ハーンの思想は、一面で「楽天主義的」な合理性を持っていた。自然科学と社会科学を同一視し、立法権と行政権の分離した西洋の統治原則を、産業技術同様に直接導入することをもってイラン改革の基礎としていた。このためには統治者も過去の慣習に基づく統治によらず、西洋の新たな統治技術である政治経済学を学ばねばならない。マルコム・ハーンの主張は、一八七〇年代の宰相セパフサーラール Mīrzā Ḥoseyn Khān Moshīr al-Doule Sepahsālār による改革に反映され、後の立憲派にも影響を与えた。タキーザーデもそのひとりだったといえよう。

マルコム・ハーンは一八九〇年代になると、『カーヌーン』Qānūn 紙において、それまでの官僚主導の改革案を捨て、国民主権の主張を明確化させることで、台頭しつつあったナショナリズム運動に刺激を与えた。[10] 同時に、王制批判、宮廷官僚や一部宗教指導層の腐敗に対する批判など、イランの政治・社会に対する批判のトーンが激しくなっていく。これは、他の立憲思想家にも見られるものだった。例えば、ロシア領コーカサスで活動したアゼリー人でありながら、終生イラン人アイデンティティを保ち続けたアーホンドザーデ Mīrzā Fatḥ-'Alī Ākhondzāde も、戯曲を通じてイラン社会を風刺し、専制批判、宗教批判を行った。

アーホンドザーデは、イラン腐敗、衰退の原因をアラブの征服とイランのイスラム化に求め、逆にアケメネス朝期の古代イランを賛美するイラン・ナショナリストの嚆矢であった。[11] この立場をさらに発展させたのが、アーガー・ハーン・ケルマーニー Mīrzā Āqā Khān Kermānī である。アーガー・ハーン・ケルマーニーはヨーロッパの進歩史観の影響を受け、歴史から進歩・衰退の法則性を見いだす歴史哲学に則ったイラン史の叙述を試みた。そこではやはり、アラブの征服とイスラム化にイラン衰退の主因が求められており、後の極端なナショナリズム思想に結びつくものであった。[12]

アーダミーヤト Feridūn Ādamīyat によれば、こうした批判的歴史叙述は、一九世紀におけるイランへのギボンの『ローマ帝国衰亡史』等同種のヨーロッパ歴史叙述の紹介、ヨーロッパ考古学者によるイラン考古学上の発見、またダーロッフォヌーンでのヨーロッパ史教育などに基づいたものであるとされる。[13] タキーザーデも若き日

の乱読から、フランスの歴史批判、考古学の書、またアーホンドザーデらのイラン史批判に親しんでいたと思われる。[14] これを示すものとして、タキーザーデはタブリーズで、タルビーヤトと共にイランの自然地理・歴史書『故国』*Zād va Būm* を出版し、同書第2部の歴史地理編を執筆した。その内容は、アケメネス朝キュロス王からカージャール朝のモザッファロッディーン・シャーに至るイラン王統譜であった。また『学術の宝庫』誌には、フランスのギュスターヴ・ルボンの『古代文明』*Les premières civilisations* を翻訳した。[15]

『歴史的裁定によるイラン現状分析』は、タキーザーデのタブリーズにおける立憲思想への傾倒と、政治・文化活動の総決算というべき論文で、立憲主義者としてのマニフェストともいいうるものだった。タキーザーデは後年、この論文を評して、「当時私の名声の原因となったが、今日の知識人にとっては若い詩人の初歩的詩としか受け止められず、評価されないだろう。」と述べている。[16] しかしタキーザーデも認めているように、『ヘクマト』紙に掲載され、その直後タブリーズでも刊行されたこの論文が、タキーザーデの名を高らしめ、タブリーズ選出国会議員となる因となったのは事実である。例えば当時駐独大使だった改革派王族のエフテシャーモッサルタネ Ḥāj Mīrzā Maḥmūd Khān Eḥteshām al-Saltane（第二代国会議長）も、この論文を読んで感銘を受け、イラン帰還の際タブリーズに赴き、タキーザーデと会って「イランに来るべき人が来た」と述べたという。[17] つまりこの論文は、タキーザーデの若き日の書物の乱読、それによるある意味での模倣に発しながら、改革派王族を含む当時の立憲派グループに受け入れられるだけの、独自のナショナリズムと立憲思想を表明するものであったといえるのである。

第二節　『歴史的裁定によるイラン現状分析』

『歴史的裁定によるイラン現状分析』は、その名が示す通り、アーガー・ハーン・ケルマーニー同様イラン史を批判的にとらえ直し、そこから一定の法則性を見いだし、西洋に対する当時のイランの後進性、衰退の原因を探る試みである。

タキーザーデはこの論文の冒頭で、「新たな社会諸科学、文明哲学で証明されたように、地上の全物質とその物質に付随する精神は、成長の法則と進歩の法則に従っている。」とする。その上で、「例えば言語、学問、政体、

慣習などの社会、文明の諸様態はこの公式に従っている。こうした社会的諸様態の成長法則の研究は「歴史哲学」と呼ばれる学問で、近年非常に進歩した。」と述べ、歴史哲学の一分野である諸政体成立・変遷の学に基き、イランの政体について究明する、としている。[18]

この方法により、タキーザーデはイラン史の変遷を植物の成長と同一視し、その政体を樹木、統治者を樹木を管理する庭師、イランの地を庭園になぞらえて記述する。ここには、西洋医学をも修めたタキーザーデの、自然科学的視野で社会現象をもとらえるという、一九世紀ヨーロッパの思想的影響が看取される。「ちょうど熟練した医者が疾病の正確な同定のため患者の病歴を調べ、その病因を究明するのと同様、王朝の痛みを直す医者、文明の医師も、社会的疾病の究明のためその(社会の)過去の話を聞き、ある社会集団の衰退の原因究明のため、歴史を自らの学問的研究の前提とする。」との記述からも、これは伺われる。[19] 以下、この論文におけるイラン史各時代の評価について、原文の要約を付しつつ、概観しよう。

a、古代イラン

イランの政体は、古代アッシリアの古い大樹が根絶された時期、メド王朝(メディア)によってその種子が植えられ、現在のイラク、小アジアに達する若木に成長した。二五〇〇年前、アケメネス朝の創設者キュロス王が、この若木と、自らのアーリア族fasīle-ye āryeからなるパールスの王国たる若木を結合させ、全西アジア、中央アジア、北アフリカに達する非常な大樹となった。[20] 二三〇年にわたりこの大樹は枝葉を茂らせ、花を咲かせ、甘美な実を実らせた。だがこの時代の末、統治者たる庭師たちは、鳥や蛇の侵入、根を蝕む虫への監視を怠り、その大樹の巨大さに依存してその内部を専制の虫が蝕んでいることに気付かなかった。この結果ギリシャからのアレクサンダー軍という大洪水によって滅ぼされ、庭園は荒廃した。[21]

ここでは、アケメネス朝の古代イランを全盛期とする当時のナショナリストと同質の見解が示されている。しかしタキーザーデは統治者の腐敗と専制が滅亡の因となったとし、古代イランの無条件の賛美は行っていない。これに関連し、タキーザーデは同論文の他の箇所で、ギリシャ人を評価して、当時最も文明化した民族であり、そのイラン支配は短期間であったが、イランの言語・慣習など全ての社会事象に重大な変更を及ぼした、として

いる。[22] すなわち、アケメネス朝は、実証的に証明される限りにおいて、イランの政体の元となる大王朝を築いた点で評価されるが、ギリシャに比べ文明として進んでいたわけではない。ここには、古代イランの誇るべき点を認めつつも、その絶対視はしないという、アーガー・ハーン・ケルマーニーに比べ、より中庸を得たナショナリズムが見て取れる。

アレクサンダーの征服後、植物学の法則に則り、本体の根から派生した樹が本体弱体化の後成長し、パルティア王国を築いた。パルティア王国は五〇〇年近く続いたが、本体の巨大さには及ばなかった。本体滅亡の後六〇〇年を経て、本体の根が再び活動を開始し、ササン朝という大樹が出現した。ササン朝は一度枯れた樹から生まれたため、アケメネス朝程の大きさにはならなかったとはいえ、四〇〇年に亘り西アジアに花園を広げた。だが庭師たちは過去から教訓を得ず、抑圧された人々の涙に意を払わず、その果実を遊蕩に蕩尽した。またアラブ、ローマなど他民族を軽視し、ゾロアスター教への依存と専制君主崇拝に陥った。この結果、神の怒りの炎が燃え、アラビア半島からアラブ軍の大洪水が押し寄せ、大樹を根こそぎにした。こうして神の復讐によって、抑圧された人々は抑圧者から解放された。[23]

ここではイラン史の相対化がより深まり、その衰退の主因が、支配層の腐敗という内部的なものであることが明確化される。またゾロアスター教批判に見られるように、具体性には乏しいものの、権力と結合した宗教に対する批判がなされている。タキーザーデはウラマーとしての一定の教育を受けた経験を持ち、このように、ゾロアスター教に限らず宗教、あるいは宗教指導層が権力と接近する危険性を自覚していた節があるものと思われるが、この点は、『カーヴェ』紙における宗教批判においてより明確化されることになる。また、アーガー・ハーン・ケルマーニーが、ゾロアスター教を「高貴なアーリア民族」の宗教として賞賛したのに対し、[24] タキーザーデは無条件の賛美を行っておらず、諸宗教を相対的にとらえる客観的立場をとっていることが伺われる。ただし、腐敗したササン朝に対するアラブ・ムスリムによる征服を、「神の怒りの炎」、「神の復讐」といった言葉で表現していることから、タキーザーデが宗教そのものを否定していたわけではないことも暗示されよう。

b、アラブ・モンゴルの征服

アラブの征服という洪水はイランに長くとどまった。アラブという相反する要素の混合の後、平均化の法則 qānūn-e ta'thīr-e vasaṭ すなわち、二つの民族が混合した際、文明的に遅れた民族が先進民族の文明の影響を受け、その域に達するまで進歩する、との法則は遅々として進まなかった。アラブと混合した結果イラン民族の進歩も止まり、かえってその言語、慣習、宗教、倫理への抑圧が起こり、停滞に至った。しかし本体の古い根は地下で活動を続けた。アラブの洪水が引いた後、二五〇年後にサッファール朝、サーマーン朝といったイラン民族の王朝が復活する。これら王朝も、大洪水によりイランの地が荒廃していたため、すぐ枯れ、滅亡してしまった。その後、大洪水による変動でトルキスタンからもたらされた若木が根付き、セルジューク朝が成立した。セルジューク朝は、平均化の法則によりイラン文明に吸収されながら一時繁栄し、古代の大樹の大きさにまで達したが、やがて滅亡する。総じてこの時期、イランの庭園はアラブ、トルコといった外来民族とイラン民族の争いの場と化した。イラン民族はササン朝末期の腐敗のため充分独立できず、アラブの影響下、パフラヴィー語（ササン朝期中世ペルシャ語）も失った。しかし、イラン人はその伝統によってアラブの征服に対し民族性を保った唯一の民族で、この時期、学問、産業に大きな貢献をなした。[25]

このように、タキーザーデもアラブの征服に対し否定的見解を有する。ただし、タキーザーデの特色は、征服後のイランの停滞を、「平均化の法則」という法則によって説明していることである。イスラームもまた、イラン停滞の原因としてとりあげられておらず、アーガー・ハーン・ケルマーニーとは著しい対照をなしている。ここには、イラン民族を絶対視し、アラブ、あるいはトルコを見下すといった民族的偏見は見られない。むしろ歴史を貫く法則に則り、ササン朝末期の腐敗という内部要因も手伝ってイランの停滞は起こったとされる。イスラーム文明に対するイラン人の貢献を評価する点で、タキーザーデはナショナリズムの立場を基本的に維持している。しかし、後進民族が先進民族の文明の域に達するのには時間を要する、という一般法則にあてはめてイラン停滞の必然性を説明することで、イラン民族の相対化をさらに深化させている。

この時期、やはり庭師たちが腐敗し、低劣な者たちを雇って、共に農民、商人の財貨を略奪した。人民の財産を（低劣な）人民と共に貪った。大衆倫理も混乱し、社会に腐敗が広がった。この結果、悪を排除する悪として、モンゴル高原からの燃えさかる炎がイランの庭園を焼き尽くした。モンゴル軍の攻撃はアジア全土を覆い、アジア文明を衰退させた。特にイランは激しく攻撃され、三〇〇年近くイランの花園は墓場と化した。東洋の衰退と西洋の進歩の原因はこの時期にある。モンゴルの侵攻を受けなかった西洋の野蛮人 barābere-ye farang は経験的諸学によって文明化し、発明が相次いだ。他方イランでは学問の火は消え、外国に無知となった。平均化の法則に則り、ちょうど沸騰した湯に冷水を混ぜると湯のカロリー半分が冷水を熱するため失われるように、後進民族によって停滞・後退が起こった。こうして数世紀の後東洋が目覚めると、西洋のライバルは学問のあらゆる分野、芸術、産業で遥かに進歩していた。モンゴル侵攻後、東洋は自尊心、自己努力の精神を失っており、西洋との競争を不可能とみなした。学問と文明に必要な独立を失ったイランも、こうした精神を無くしてしまっていた。(26)

タキーザーデはモンゴルの征服がイラン、ひいては東洋衰退の原因としている。近年の研究によるモンゴル時代評価とはもちろん矛盾するが、ここで問題なのは、アラブと同等かそれ以上にモンゴルを衰退の主因とするその歴史観である。タキーザーデにとってモンゴルの征服によるイラン、東洋の停滞も「平均化の法則」の具現化に他ならない。他方、西洋の進歩も、たまたま征服を受けなかったことによって西洋がこの法則を逃れたためである。いわば、イランも本来所有していた理性的学問によって「野蛮人」が文明化したに過ぎない。このように、あらゆる民族はこの法則の前に相対化されることとなる。この背景には、西洋を絶対視せず、学問導入によって追いつくことができる、との認識が存在することが了解されよう。

タキーザーデは進歩の手段としての学問を強調しているが、同時に自己努力といった精神面も重視している。統治者の腐敗が大衆の倫理的腐敗に繋がり、モンゴル侵攻を招いたとするのも、征服の結果自立心、競争心を無くしたとするのも、学問・技術導入以前に倫理的健全性、精神的自立性が重要ということである。ここでは統治者

に対する専制批判の枠が越えられ、イラン人一般の精神的停滞状況にまで批判が及んでいる。

c、サファヴィー朝、カージャール朝

ヒジュラ暦一〇世紀初め、イランに新春が訪れた。次第に若木が成長し、サファヴィー朝となった。サファヴィー朝は短期間の内に古代の大樹のように大きくなり、枝葉を西アジアに伸ばし、アラブ征服後初めて独立・安定を得た。しかし協議、秩序ある統治に則らず、庭師の怠惰による荒廃に任せ、圧制が行われた結果、アフガン人の攻撃によって滅んだ。その後ナーデル・シャーが現れ、諸改革をなした。だが、王個人の恣意で政治が動かされ、憲法・科学的諸組織に基づかなかったため、アフシャール朝、次いでザンド朝は創設者の死と共に滅んだ。ヒジュラ暦一三世紀初め、新たな若い王朝・カージャール朝が成立した。国土を本来の広さまで拡大し、モンゴル征服後2度目の独立・安定期となった。しかし、カージャール朝は伝来の腐敗・怠慢による遺伝的慢性病 amrāḍ-e mazmane-ye erthīye を患っていた。国民は世界情勢に無知で、学問、産業は消滅してしまった。宗教指導層も人々の心を操り、進歩を阻害している。プラトン、アリストテレスもこの病を直せず、メシアの息吹、ナーデル・シャー、ピョートル大帝、ミカドの力が必要である。この間、西洋は学問・技術により非常に強大となり、蒸気と電気が世界を支配するようになった。西洋人は学問を武器に東洋人の無知につけ込み、世界を占領しつつある。カージャール朝は世界に目を開き、西洋との圧倒的差に気づいたが、伝来の病を直せないままである。看護者は治療法が明らかなのに、私欲を公益に優先させ、病人の財貨を奪うことに専念している。アミーレ・キャビールによる、学問、秩序、法を使った治療も、利己主義者たちに阻害され挫折した。統治者たちは専制をなし、農民、商人の財貨を奪って巨富を築いている。(27)

タキーザーデはサファヴィー朝、カージャール朝をイラン民族王朝として評価しながら、専制によって滅亡・衰退に至っているとする。特にタキーザーデと同時代にあたり、アミーレ・キャビールの改革すら失敗させたカージャール朝の腐敗に対する批判は手厳しい。他方、西洋も「東洋人の無知」につけこんでいると批判される。だが、タキーザーデの批判の矛先は、前近代からの腐敗

した体質を抱えた王制、あるいは宗教指導層といった内部的問題により激しく向けられている。

たとえナーデル・シャーのような英明な君主であっても、「憲法・科学的諸組織」に則った永続的政体でない限り、腐敗・衰退を癒すことはできない。ここには、『カーヌーン』紙において、王制批判と同時に、西洋式立憲制導入をより強く主張するに至ったマルコム・ハーンと基本的に同質の立憲思想が見いだされる。ただし、ピョートル大帝等の力が必要、との表現から、タキーザーデは王制そのものは否定せず、あくまで君主制の枠内における改革を求めていたことも推察される。立憲運動において、専制批判は共通項として存在したが、王制に対する立場はこの運動に参加した各人によって微妙に異なっていた。例えばアーガー・ハーン・ケルマーニーは、社会主義思想の影響を受け、共和制樹立と王制否定に傾いていたとされる。[28] タキーザーデも、革命において急進派と位置づけられることが多く、ブラウンによれば、特に第1次立憲制（一九〇六～一九〇八年）においては殆ど社会主義者と見なされていたという。[29] しかし、王制に対する見解に関し、同じ急進派といっても、アーガー・ハーン・ケルマーニーや、一部の社会民主主義者に比べ、より穏健な立場をとっていたことが推測される。

カージャール朝の専制が度を越した結果、ある程度の改革がなされた。これだけで知識に乏しい同胞は喜び、ショーヴィニスム chauvinisme（偏狭な愛国主義）に陥って枝葉末節を賞賛している。だが改革は依然なされておらず、専制が国全体を覆っている。東洋における同病人（日本）が学問の薬で回復したように、我々も自画自賛を止め、真の治療をすべきである。それは、西洋の諸原則に則った秩序あり公正な政体の設立と法制定・公正の実現、及び国民への学問普及と学校拡大の2つである。これらに着手しなければ病人は命を失うこととなろう。国民から独立の精神が失われ、国土は消滅しよう。一部思想家は経験によらない理性を使って、イラン民族は常に征服諸民族を同化する、としている。ところが、七千年の世界史から得られる真の法則は、二つの民族が混合した場合、征服者、被征服者を問わず、より文明の高い方が勝ち、同化する、ということである。さらに現在は、イギリス人のような弱小民族が、植民地の諸原則、政治経済の諸原則、という学問・技術を使って巨大な諸民族を支配している。これら

諸国は東洋分割、勢力圏設定をなしつつあり、トルコ分割について協議している。他方、我々はショーヴィニスムに陥り、過去を賛美し、学問・発明すべてはイランに発するとしている。商業・農業・工業発展、宗教護持、勝利・栄誉獲得のためには、早急に新文明を受容し、その諸原則をそのまま実施するしかない。さもなければ、その時代の文明を受容しない政体・民族は消滅する、との絶対的法則に従い、イランは滅亡するだろう。(30)

タキーザーデは、「平均化の法則」によって西洋文明の前にイランが滅びることを訴えている。同時にショーヴィニスムに対する憂慮が表明される。一部ナショナリストのこうした傾向は、後にパフラヴィー朝におけるアーリア民族主義、国粋主義的流れに結びついていく。これに対し、タキーザーデは、「古代イラン神話」に寄りかからず、歴史的事実に基づいた冷厳な法則によってこのままではイランは滅びる、とすることで、こうした傾向にこの時期はやくも警鐘を発している。

この論文において、タキーザーデは直接アーガー・ハーン・ケルマーニーについて言及しておらず、また回想録においても、影響を受けた立憲思想家の書物の中にアーガー・ハーン・ケルマーニーの名は入っていない。しかし、タキーザーデはタブリーズにおいて、書店を経営しながら立憲思想の書を乱読した経験を持ち、アーガー・ハーン・ケルマーニーの書の一部にも目を通していた可能性は大きい。この論文で、歴史を通じたイラン批判のスタイルを採っているのも、これを示すものかもしれない。それにもかかわらず回想録でアーガー・ハーン・ケルマーニーについて何も触れられていないことは、タキーザーデがその極端なナショナリズムに賛同しなかったためとも思われる。タキーザーデが後年、シュウービーヤ（アッバース朝期の、アラブに対するイランの優越性を説いた運動）的偏向 ta'aṣṣobāt-e shoʿūbī の代表例としてアーガー・ハーン・ケルマーニーを批判しているのも、これを示すものと言えるだろう。(31)

この論文で、タキーザーデは外国勢力による危険よりも、専制による腐敗、独立精神喪失、ショーヴィニスムなどイラン内部の問題により大きな危険性があることを繰り返し述べており、タキーザーデの立場が、「自画自賛」的ナショナリズムとは一線を画した、より批判的なナショナリズムであることが確認される。(32) また王制に対し、批判はするが否定はしない、という立場をとってい

るものと思われ、急進派といってもカージャール王制を既成事実として認めた上での改革を求めるという、一種の現実主義が看取される。付言すれば、タブリーズ出身のアゼリー系イラン人であったことも、タキーザーデがイランをあるいは植物に、あるいは病人に見立てて客体視しえた点と関連しているといえるかもしれない。

マルコム・ハーン同様、イラン滅亡の危機に対するタキーザーデの処方箋は、立憲制を旨とする西洋の統治技術の直接導入である。同時に、タキーザーデは、国民への学問普及を改革のひとつの柱としている。単に立憲制を機械的に導入するだけではなく、国民への近代教育普及による「民度」向上、加えて独立精神など倫理面の回復が、立憲制を下から支えていくものとなる。こうした教育改革の信条は、マルコム・ハーン、セパフサーラールも所持し、マレコル・モタカッレミーン Ḥāj Mīrzā Naṣro'llāh Malek al-Motakallemīn などの立憲主義者にも継承されていった。(33) ただし、この論文では、一般大衆は統治者に対して概ね「抑圧された人々」といったトーンで描かれており、知識人とはいえタブリーズの庶民層出身であったタキーザーデが、マルコム・ハーンを含む改革派官僚に比べ、より大衆の側に立った改革を求めていたことを伺わせる。国民への教育普及を改革の二つの柱のひとつに数えたのも、これを反映するものであり、マレコル・モタカッレミーンを含む当時の立憲主義者の多くが、教育改革、特に高等教育よりも初等教育の重要性を主張したことと呼応するものと思われる。

教育改革は、立憲革命において、一九〇七年に制定された憲法補則の第一八条に教育の自由が謳われ、第一九条に教育省の管轄下、義務教育が実施されるように規定されたのをはじめ、一九一一年に教育法が制定されるなど、初等教育を中心に、次第に制度として整えられていった。(34) しかし、これから見る『カーヴェ』紙でタキーザーデが述べるように、大衆への教育普及は非常に長い期間を要するものであった。

これまでの概観より、タキーザーデは、イラン史を可能な限り客観的に把握した上で、イラン、及びイラン民族に対し、比較的バランスのとれた評価を行っていることが確認される。タキーザーデによる、ゾロアスター教を含めた古代イランに対する批判的評価、アラブ・モンゴルの征服による、歴史法則に則ったイラン衰退の必然性の説明、そして同じ歴史法則によって西洋文明の前にイラン滅亡を訴える警告などは、若き日のタブリーズに

おける学問的研鑽を基として割り出されていった独自のイラン観に基づく、批判的、かつ中庸を得たナショナリズムを示すものといえよう。この論文から推測されるタキーザーデの国家改革の青写真は、大筋では、カージャール朝の存続を認めた上で、西洋の立憲制を可能な限り完全に導入し、近代教育を普及させ、イランの歴史・文化的一体性を保持し、国民主権の近代国家を形成していく、というものであったと思われる。タキーザーデはこうした思想を背景に、国会議員として立憲革命に参加し、数々の国会演説を通じて名を馳せていく。そして国家予算の策定を始めとする財政改革、国民主権を旨とする憲法補則の制定などに参画し、ナショナリズムに基づいた近代的国民国家形成のために努力を傾注していくこととなる。しかし、先に指摘した王制に対する立場を含め、タキーザーデの抱くナショナリズム、立憲思想と、他の人々のそれとは必ずしも完全に一致するものではなかった。

これに関連し、モジュタヘディー Mehdī Mojtahedī は、タキーザーデの伝記の中で、この論文を、タキーザーデが革命以前に既に西洋の民主主義・議会政治を信奉する立憲主義者であったことを示すものとして評価しているが、同時に、当時は立憲制について様々な見解が存在したことを指摘している。[35] それによれば、当時の多くの人々にとって立憲制とはアダーラト・ハーネ ʿadālat-khāne（「公正の家」の意で、革命当初、立憲派のスローガンとなっていた）という曖昧な語と同義であり、その他の一部の人々にとってはイスラーム全盛期の公正な体制への回帰、テヘランの貴顕の士にとってはシャーの権力の制限、タブリーズとラシュトの立憲派にとってはアゼルバイジャンとギーラーンの分離、そして一般大衆にとってはパンの価格の低下を意味するものであったとされる。タキーザーデの初期立憲思想とは多くの点で一致しないこうした多様な見解は、革命において、タキーザーデの描いた理想とは対立する要因として作用していったものと推察される。

タキーザーデが、初期思想において大衆の側に立った専制批判を展開していることは先に述べた。また、タキーザーデは、一九〇四～一九〇五年にかけてのトルコ・エジプト旅行、及び一九〇六年、タブリーズから革命直前のテヘランに向かう際に、コーカサス経由の旅程を採り、ティフリス、バクーでアゼリー系の知識人、及び社会民主党関係者と接触しており、革命直前には社会

民主主義にも既に一定の理解を有していたと思われる[36]。革命において、タキーザーデを左派系急進派とする位置づけの妥当性が、ここからも示されることになるが、これまで述べてきたように、タキーザーデの思想的根底には、マルコム・ハーンやフランスの啓蒙思想書の影響を受けた古典的立憲主義が存在し、王制を始めとする既存のイラン社会の秩序をある程度保った上での改革をより強く指向していたものと考えられる。この意味で、タキーザーデは、より急進的な社会民主党員やモジャーヒディーンとは微妙に異なる指向性を、革命当初から有していたものと推測されよう。こうした微妙な相違は革命の過程で次第に顕在化し、『カーヴェ』紙におけるタキーザーデの痛烈な革命批判、大衆批判にも反映していったものと考えられる。

いずれにせよ、以下『カーヴェ』紙を概観する中で明らかになるように、タキーザーデの初期立憲思想に見られる歴史観、ナショナリズム、立憲制への信奉、そして教育改革の信条の本質的部分は、革命を経ても大きく変更しなかったものと思われる。

参考文献

Ādamīyat, Ferīdūn. 1340/1961-1962. *Fekr-e Āzādī va Moqaddame-ye Nehḍat-e Mashrūṭīyat.* Tehrān, Enteshārāt-e Sokhan.

Ādamīyat, Ferīdūn. 1349/1970-1971. *Andīshe-hā-ye Mīrzā Fatḥ-'Alī Ākhondzāde.* Tehrān, Enteshārāt-e Khārazmī.

Ādamīyat, Ferīdūn. 2535. *Īde'ūluzhī-ye Nehḍat-e Mashrūṭīyat-e Īrān.* Enteshārāt-e Payām.

Ādamīyat, Ferīdūn. 1357/1978-1979. *Andīshe-hā-ye Mīrzā Āqā ĀKhān Kermānī.* Tehrān, Enteshārāt-e Payām (2nd ed.).

Afary, Janet. 1996. *The Iranian Constitutional Revolution, 1906-1911, Grassroots Democracy, Social Democracy, and the Origins of Feminism.* New York, Colombia University Press.

Afshār, Īraj ed. 1349-1357/1970-1971 ~ 1978-1979. *Maqaīlāt-e Taqīzāde.* 10 vols. Tehrān.

Afshār, Īraj ed. 1356/1977-1978. *Kāve.* Tehrān.

Afshār, Īraj ed. 1372/1993-1994. *Zendegī-ye Ṭoufānī, Khāṭerāt-e Seyyed Ḥasan Taqīzāde.* Tehrān, Enteshārāt-e 'Elmī (2nd ed.).

Algar, Hamid. 1969. *Religion and State in Iran, 1785-1906.* Berkeley, University of California Press.

Bayat-Philipp, Mangol. 1980. "Mirza Aqa Khan Kirmani." *Towards a Modern Iran* (E. Kedourie and S.G. Haim eds.), pp.64-95, London, Frank Cass & Co.

Browne, Edward Granville. 1966. *The Persian Revolution of 1905-1909*. London, Frank Cass & Co.(new ed.)

Cottam, Richard W. 1964. *Nationalism in Iran*. University of Pittsburgh Press.

Djamalzadeh, Mohammad Ali. 1962. "Taqizadeh, Tel que je l'ai connu." Maqālāt-e Taqīzāde. vol.7. (I.. Afshār ed.) , pp.743-760.

Ettehādīye, Manṣūre. 1375/1996-1997. *Majles va Entekhābāt az Mashrūṭe tā Pāyān-e Qājārīye*. Tehrān, Nashr-e Tārīkh-e Īrān.

Hāshemī, Moḥammad Ṣadr. 1364/1985-1986. *Tārīkh-e Jarā'ed va Majallāt-e Īrān*. vol.4, Isfahān, Enteshārāt-e Kamāl (2nd ed.).

Menashri, David. 1992. *Education and the Making of Modern Iran*. Ithaca and London, Cornell University Press.

Mojtahedī, Mehdī. 1357/1978-1979. *Taqīzāde Roushangarīhā dar Mashrūṭīyat-e Īrān*. Tehrān. Mo'assese-ye Enteshārāt va Chāp-e Dāneshgāh-e Tehrān.

Najmī, Nāṣer. 1362/1983-1984. *Dār al-Khelāfe-ye Tehrān*. Tehrān, Enteshārāt-e Hengām (2nd ed.).

Parsinejad, Iraj. 1988. *Mirza Fath Ali Akhundzadeh and Literary Criticism*. Tokyo, Studia Culturae Islamicae 34.

Taqīzāde, Seyyed Ḥasan. A.H.1323/1905-1906. "Taḥqīq-e Ḥālāt-e Konūnī-ye Īrān bā Moḥākemāt-e Tārīkhī." *Maqālāt-e Taqīzāde*. vol.4. (I. Afshār ed.), pp.3-35.

Taqīzāde, Seyyed Ḥasan. 1329/1950-1951. "Ba'dī az 'Elal-e Taraqqī va Enḥeṭāṭ-e Tārīkhī-ye Īrān." *Maqālāt-e Taqīzāde*. vol.4. (I. Afshār ed.), pp.172-181.

Taqīzāde, Seyyed Ḥasan. 1338/1959-1960. "Tahīye-ye Moqaddemāt-e Mashrūṭīyat dar Ādharbāyjān." *Maqālāt-e Taqīzāde*. vol.1. (I. Afshār ed.), pp.377-388.

Taqīzāde, Seyyed Ḥasan. 1339/1960-1961. "Akhdh-e Tamaddon-e Khārejī, Āzādī, Vaṭan, *Mellat, Tasāhol*." *Maqālāt-e Taqīzāde*. vol.4. (I. Afshār ed.), pp.183-217.

Taqīzāde, Seyyed Ḥasan. 1340/1961-1962. "Sargodhasht-e Seyyed Ḥasan Taqīzāde." *Maqālāt-e Taqīzāde*. vol.3. (I. Afshār ed.), pp.280-296.

Taqīzāde, Seyyed Ḥasan. n.d. "Che No' Kotobī Bāyad Tarjome Shavad." *Maqālāt-e Taqīzāde*. vol.3. (I. Afshār ed.) , pp.19-22.

Vatandoust, Golamreza. 1985. *Sayyid Ḥasan Taqīzādeh and 'Kāveh': Modernism in Post-Constitutional Iran (1916-1921)* . Ann Arbor. University Microfilm International.

上岡弘二　一九九四「イランの民族と文化ーそれを定位するための座標を巡ってー」『イスラム世界』44、pp.37-60.

黒柳恒男　一九六九『王書　ペルシア英雄叙事詩』平凡社。

小牧昌平　一九八三a「Malkom Khān の初期の政治活動をめぐってーイラン近代史上の一問題ー」『史学雑誌』92-8、pp.66-86.

小牧昌平　一九八三b「Malkom Khān の Qānūn について」『アジア・アフリカ言語文化研究』25、pp.61-97.

鈴木均　一九八六「イスタンブル在住イラン人とタバコ・ボイコット運動―ペルシア語紙『アフタル』の分析を通じて―」『アジア・アフリカ言語文化研究』32、pp.143-178.
八尾師誠　一九九一「エブラーヒム・ベクの旅行記」『イスラム世界』35、36、pp.41-149.
八尾師誠　一九九八『イラン近代の原像』東京大学出版会。
藤井守男　一九八三「ターレボフの人と思想」『東京外国語大学論集』33、pp.191-209.
藤井守男　一九八四「ミールザー・ファテ・アリー・アーホンド・ザーデ Mīrzā Fatḥ-'Alī Ākhond-zāde (1812～78) とイラン一文学史的側面から―」『東京外国語大学論集』34、pp.217-234.
藤井守男　一九八六「アーホンド・ザーデ Ākhond-zāde (1812-78) に見る「イラン・ナショナリズム」の諸相」『オリエント』29-2、pp.85-101.
（ペルシャ語文献の出版年はイラン暦（一部ヒジュラ暦・皇帝暦）で記し、西暦を付した）

注

(1) タキーザーデの活動についての以下の記述は、Afshār ed. 1372/1993-1994 に基づく。
(2) 同書はイランの歴史的暦の研究で、1316/1937-1938 年発行。Afshār ed. 1349-1357/1970-1971～1978-1979, vol.10 に再録。
(3) Cottam 1964, pp.7-15.
(4) Afary 1996, pp.81-86.
(5) Afary 1996, pp.249-250.
(6) タキーザーデの著作は、イーラジ・アフシャール Īraj Afshār の編集により著作集が刊行されており、ここでは『歴史的裁定によるイラン現状分析』について、同著作集収録のテキスト（Taqīzāde A.H.1323/1905-1906）を使用した。イーラジ・アフシャールの注によれば、同テキストは、国家文化財協会図書館 Ketābkhāne-ye Anjoman-e Āthār-e Mellī に保存されたタキーザーデの手稿から載録されたもの（Taqīzāde A.H.1323/1905-1906, p.33）。なお、同著作集は全一五巻の予定であり、残りの五巻は未刊行。また『カーヴェ』紙についても、イーラジ・アフシャールによる復刻版（Afshār ed. 1356/1977-1978）を使用した。
(7) Afshār ed. 1372/1993-1994, pp.26-27. なお、近年、日本においてこれら立憲思想の書、改革派新聞に関する研究が進められてきている。マルコム・ハーンについての研究として、その初期活動に関し、小牧 1983a、またマルコム・ハーンの新聞『カーヌーン』Qānūn に関し、小牧 1983b がある。ターレボフについては、藤井 1983 においてその思想が分析されている。『エブラーヒム・ベクの旅行記』は、八尾師 1991 において、部分訳がなされている。また、『アフタル』については、鈴木 1986 に、タバコ・ボイコット運動に対する同紙の論調が分析されている。
(8) Taqīzāde 1338/1959-1960, p.380.

(9) Ādamīyat 1340/1961-1962, pp.93-181.
(10) 小牧 1983b, pp.81-82.
(11) Ādamīyat 1349/1970-1971, pp.119-136. アーホンドザーデの思想に関する研究として、藤井 1984 及び藤井 1986 がある。また、Parsinejad 1988 において、アーホンドザーデの近代的文学批判の手法が分析されている。
(12) Ādamīyat 1357/1978-1979, pp.149-211.
(13) Ādamīyat 1357/1978-1979, pp.151-154.
(14) タキーザーデは後年、政治紙に「如何なる書が翻訳されるべきか」と題する論説を書いている（Taqīzāde n.d.）。同論説によれば、イランに翻訳されるべき書の条件の一部として、モンテスキューの『ローマ帝国盛衰原因論』のような高度な歴史哲学書を訳す場合は、まずギボンの書を訳し、前提となる知識を得ること、また中国史のような些末な主題の書は当面避け、ギリシャ史、ローマ史の書は万人に有益なため細密に訳されること、とされる。後年にも、フランス系歴史哲学の影響が継承されていたことを伺わせる。
(15) Afshār ed. 1372/1993-1994, pp.35-36.
(16) Taqīzāde 1329/1950-1951, p.173.
(17) Afshār ed. 1372/1993-1994, p.332.
(18) Taqīzāde A.H.1323/1905-1906, pp.3-4.
(19) Taqīzāde A.H.1323/1905-1906, p.18.
(20) 上岡 1994 にみられるように、イラン人による、ヨーロッパ白人により近いという意味での「アーリア民族」としての主張は近年疑問視されている。タキーザーデがここでアケメネス朝の中核民族を「アーリア族」と呼んでいるのは、こうした「俗説」とは異なり、当時の西洋の民族学・言語学に基づいた、インド・ヨーロッパ語族の一分派としての位置づけが背景にあるものと思われる（注44参照）。
(21) Taqīzāde A.H.1323/1905-1906, pp.5-6.
(22) Taqīzāde A.H.1323/1905-1906, p.28.
(23) Taqīzāde A.H.1323/1905-1906, pp.7-8.
(24) Bayat-Philipp 1980, pp.79-80.
(25) Taqīzāde A.H.1323/1905-1906, pp.9-12.
(26) Taqīzāde A.H.1323/1905-1906, pp.13-19.
(27) Taqīzāde A.H.1323/1905-1906, pp.20-26.
(28) Ādamīyat 2535, pp.270-272. 及び Bayat-Philipp 1980, pp.82-83.
(29) Browne 1966, p.146.
(30) Taqīzāde A.H.1323/1905-1906, pp.26-33.
(31) Taqīzāde 1329/1950-1951, p.174.
(32) 八尾師 1998, pp.60-61. によれば、ナショナリズムの枠内において、タキーザーデはマルコム・ハーンの立憲思想を継承し、アーガー・ハーン・ケルマーニーに見られる極端なナショナリズムの流れとは別のグループに属していたとされるが、この論文からもこの点が確認される。
(33) Menashri 1992, pp.27-39.
(34) Menashri 1992, pp.77-79.

(35) Mojtahedī 1357/1978-1979, pp.30-31.
(36) Afshār ed. 1372/1993-1994, pp.37-40, pp.52-54.